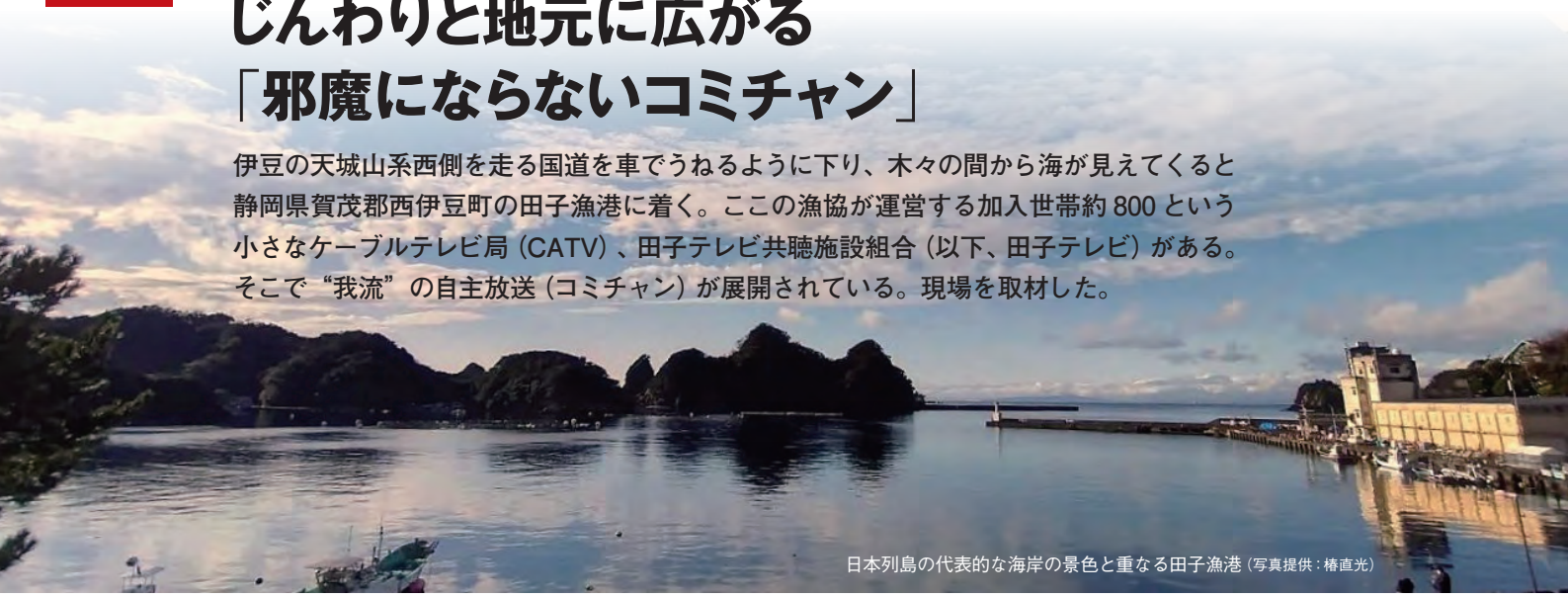
NM編集部
レポート

予算も機器もスタッフ数も“不揃い”な漁協CATV

じんわりと地元に広がる「邪魔にならないコミチャン」

● レポート・写真：吉井 勇・本誌編集部

伊豆の天城山系西側を走る国道を車でうねるように下り、木々の間から海が見えてくると静岡県賀茂郡西伊豆町の田子漁港に着く。ここの漁協が運営する加入世帯約 800 という小さなケーブルテレビ局（CATV）、田子テレビ共聴施設組合（以下、田子テレビ）がある。そこで“我流”の自主放送（コミチャン）が展開されている。現場を取材した。



日本列島の代表的な海岸の景色と重なる田子漁港（写真提供：椿直光）

「手間かけず」の動画制作

田子漁港の波止場に面する昭和を感じる建屋の２階に田子テレビはある。一室には古びたラックに１台の変調器と運用システムがあり、「これで西伊豆町チャンネルと田子チャンネルの２つの自主放送を流しています」と田子テレビ・サポーターの庄司章氏の案内を受けた。ほかに、放送番組を確認するモニター代わりの民生用テレビが２台あり、１台には行政が YouTube で公式発信している素材を流す『西伊豆町定例町議会』を放映し、もう１台には地元の『田子小学校運動会』が映っていた。田子小の運動会は、地元のビデオ愛好家である椿直光氏が撮影・制作した素材である。「子どもたちの真剣な様子を生に近い感じで伝えたいので、ビデオカメラが集音した現場音を生かしています。また、すぐに放送するために編集にかける時間を少なくしています」（椿氏）。番組の時間（尺）は成り行きで、１日に何度も放送するリピート方式で、「尺という時間の制限はないのです」と庄司氏が説明する。熱心に地元を撮影する椿氏は、旅館たか屋を経営する西伊豆町商工会の副会長である。

なぜ、椿氏は田子テレビのコミチャンに協力するのか。その答えは「小さな地元でも知らない事がたくさんあります。それを伝えて知ってもらいたい」。また、椿氏がコミチャンの広がりをじんわりと感じるエピソードがある。「邪魔にならないテレビ」として、まる１日つけっ放しにする視聴者がいたり、住民から「撮ってよ」と声が掛かり、その番組の DVD が欲しいと言われることがあるそうだ。

庄司氏は漁港に面した窓に取り付けた小型ビデオカメラを指して、「ちょっとしたライブ映像を加えました。これで港に出入りする船を撮っています。だから、家族は家に居ながらにして『父ちゃんの船が帰ってきた』と知ることができるんです」と話す。

高齢者には「テレビ」の便利さが大事

田子テレビを運営している伊豆漁業協同組合田子支所の真野創・支所長はコミチャンを始めたきっかけを「地上デジタル放送に対応した再送信だけの CATV でしたが、庄司さんからアドバイスがあってコミチャンを始めました」と説明する。

庄司氏は若い時に下田有線テレビ放送（SHK）でコミチャンに取り組んだ経験があり、伊豆稲取のエリアにある東伊豆有線テレビ放送（ハイキャット）の立ち上げからコミチャンに取り組んできた兵（つわもの）である。「変調器があったので、これを使うと地元ならではの放送ができると伝えたら関心を持ってもらい、郡上八幡や西軽井沢、上越市の CATV を訪問してコミチャンの役割を視察してもらいました」（庄司氏）。だが、田子テレビは専任の担当者も置けず、予算も微々たるもので、編集する装置もないという状況だった。その中で真野氏と庄司氏は知恵でコミチャン稼働を実現する。その一つが、「YouTube で配信している町議会を高齢者も視聴しやすいようにテレビ放送でも流したり、地元の情報を伝えることをできる範囲でやることにしました」（真野支所長）。

コミチャンでストアー特売日を案内 集客が変わった

田子テレビは住民への情報伝達という役割も行っている。田子テレビが入る建屋の１階には、漁協が経営する「漁協ストアー」と呼ばれる小さなスーパーがある。鮮魚や肉、野菜などの食料品から日用雑貨まで扱っており、地域のよりどころになっている。店長の山本淳美さんは「毎週水曜の特売日で販売する商品を知らせたい」と田子テレビに相談。これまで特売日の情報は新聞の折り込みチラシで案内してきたが、「お年寄りは目が悪くなって新聞が読みづらいため、購読者が減り、伝える術（すべ）がなかったのです」（山本さん）。

ところが問題があった。パソコンが苦手な山本さんは、案内画面データを作ることができない。また、実物を見せたり、手書きの文字を使いたいという要望があった。そこで、庄司さんは漁協にあった古い書画カメラをビデオ入力につなげ、知らせたい商品を映したり、手書きで「特売!」をアピールする方法を提案。こうしてできた案内に促され、漁協ストアーの特売日の集客はアップ。その様子を「同窓会のようだ」と山本さんは例える。

田子テレビを支える自動番組送出「VATIC」

田子テレビを支えている一つが、株式会社ビデオ・テックが開発した自動で番組を送出する APC 装置「VATIC」だ。VATIC は全国で 180局を超えて活躍している、いわばCATV の必須アイテムである。平石能敬・代表取締役は「ノート PC 1台で緊急対応できるソフトウェアベースのAPC モデル『VATIC-Plus』を試作し、田子テレビにテスト運用・検証をしてもらっています」と話す。平石氏と庄司氏はハイキャット時代からの付き合いで、田子テレビのスタート時から何かと相談を受けていたという。

VATIC-Plus テスト版を使う中で、庄司氏から「コミチャンの送出リスト作りをもっと簡単にできないか」という要望があった。椿氏が制作する尺フリーのコンテンツに対応できるような編成を自動化してほしいのだ。平石氏は VATIC-Plus の第二世代、ver.2 のプログラム開発を一気に進め、スライド画像や動画、音楽、局ロゴなどの素材データを USB メモリーで持ち込めば、自動で取り込んでリストが表示され、編成枠（時間フリー）を設定した中にドラッグ＆ドロップの操作だけで完了する仕組みを完成させた。「これならできそう」と庄司氏は喜ぶ。

さらに、平石氏は VATIC-Plus 開発を災害時などに対応する CATV の BCP（事業継続計画）対応として進めているという。「災害が襲ってきた時、最悪の場合でもノート PC1台でコミチャンが放送できるシステムづくりを考えています」（平石氏）。

コミチャン放送に長年取り組んできた庄司氏は「幹線の光化が進み、新しい通信やネット事業で CATV が大きく成長した。ただ、本来の有線テレビ放送という『放送』の役割が弱くなってきているように感じている。コミチャンの強さは身近な生活情報を細かく丁寧に伝えることで、高齢化が進むローカル地域の生活に根差す情報提供にこだわっていきたい」と話す。椿氏が言う「邪魔にならないテレビ」ということなのか。伊豆西海岸の漁協 CATV が投げかけている。

■ コミチャン送出の装置関係

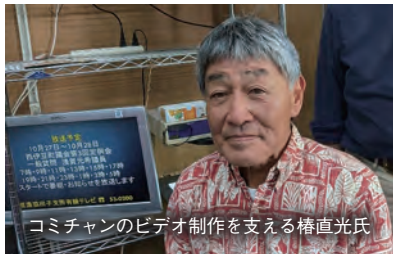
田子テレビに変調器があったから始まったコミチャンの２チャンネル送出

ビデオ・テックが開発する「VATIC-Plus ver.2」は素材をドラッグ＆ドロップで自動編成ラインアップが可能

書画カメラで手書き文字からWord作成のチラシまでコミチャン画面に取り込む

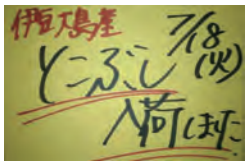
VATIC-Plus のテスト運用で実証中

■ 田子テレビを支える人たち



コミチャンのビデオ制作を支える椿直光氏

田子テレビを運用する写真前が漁協ストアー店長の山本淳美さん、後列右から庄司章氏、漁協田子支所長の真野創氏、ビデオ・テックの大石英樹氏、平石能敬氏

地元の漁協ストアーが入る建屋の２階に田子テレビの設備がある

毎週水曜の特売日に漁協ストアーに人が集まる。この２階に田子テレビの設備がある